

地域住民が模擬患者として参加した技術演習での学生の学び —今後の学習への動機付けに着目して—

¹ 吉田千鶴 ¹ 佐藤亜月子 ¹ 城野美幸 ¹ 小薬祐子
¹ 長谷川ゆり子 ¹ 志田久美子

¹ 帝京科学大学医療科学部看護学科

¹ Chizuru YOSHIDA ¹ Atsuko SATO ¹ Miyuki JONO ¹ Yuko KOGUSURI
¹ Yuriko HASEGAWA ¹ Kumiko SHIDA

Key word : 看護学生、動機付け、技術演習、模擬患者、地域住民

I . はじめに

模擬患者を導入した教育方法は1970年代に日本に紹介されている。この教育方法は主に医学教育で発展し、看護教育にはそれから遅れること30年余り、2000年頃から模擬患者を導入した報告が見られるようになった。¹⁾ 医学中央雑誌で「模擬患者」というキーワードで原著論文を検索すると1003件、さらに最新の5年間で検索すると495件(2013年12月13日検索)で最新の5年間で過去の文献数の約四分の一を占めている。文献数からみると近年多くの教育機関で模擬患者を導入した教育が実施されていることが理解できる。模擬患者を用いた教育はトレーニングを受けた者、教員が患者役となり、シナリオに沿ってケアを実施する教育方法である。この教育方法は多くの成果をあげていることが報告されている。江川らの実施した地域住民がボランティアとして参加した授業では「学生同士や教員相手での技術演習では真剣勝負になりにくく、それだけに気づきも得られにくい、初対面の模擬患者を相手にして看護のリアリティを疑似体験することで、戸惑いながらも否応なしにさまざまな気づきを得ることができるという教育効果があると考えられる。」²⁾ と述べている。

本学では今後、模擬患者を用いた技術演習を導入するために地域住民が模擬患者として参加した技術演習を試行した。その後、技術演習に参加した学生にインタビューを実施し、

学生たちが地域住民が参加した技術演習に参加したことで、多くの学びと刺激を受け、今後の学習への動機付けとなっていたことが明らかになったので報告する。

II . 研究目的

学生が地域住民が模擬患者として参加した技術演習に参加したことで今後の学びへの動機付けになったことを明らかにする。

III . 用語の定義

模擬患者：シナリオに沿って患者役を演じること
動機づけ：ある目的(目標)達成のために必要な行動や心の働きを引き起こし、持続させる一連のプロセス³⁾

IV . 研究方法

1) 質的帰納的研究

2) 研究協力者

① 4年制大学1年次の学生12名。

履修状況は共通科目(基礎分野)の人間の理解の区分では心理学、教育学、哲学と思想(選択科目)、健康体育I(選択科目)。ひととコミュニケーションの区分では基礎英語I。人間と環境の区分では情報処理I、生物学の基礎(選択科目)、科学の基礎(選択科目)、物理学の基礎(選択科目)、異文化理解(選択科目)。セミナーの区分では基礎ゼミを履修している。専門基礎科目(専門基礎分野)のこころと身体のおくみでは生態機能I。健康と社会のシステムの区分では地域コミュニティ論を履修している。専門科目(専門分野)では看護学概論、基礎看護技術I(通年)、基礎看護技術II(通年)、基礎看護学実習I(2012年7月30日～8月3日)を履修している。

② 本学の1年次の学生の背景

本学の1年次の学生は90名であり、高校卒業後

に入学している。数名の学生は高校卒業後1～2年が経過しており、年齢はほぼ同じである。

③模擬患者の背景

自治体保健センターで地域の健康促進活動に参加している者を対象に模擬患者を募集し、本研究に同意の得られた60～80歳代の男女12名。さらに事前にオリエンテーション、勉強会に参加している者。

3) データ収集方法

3日前に発熱と食欲不振を訴えた患者のシナリオに沿って技術演習に参加した後、学生にインタビューを実施した。

インタビュー実施期間：2012年9月（1回実施）

半構造化面接によるインタビューを実施した。半構造化面接では対象者にあらかじめ録音することの承諾を得て録音した。その内容の逐語録を作成した。質問項目は以下に示す。

①地域住民の方にバイタルサインの測定を実施してみて感じたこと、②バイタルサイン測定してみて地域住民の方と学生同士との違いで感じたこと、③地域住民の方とコミュニケーションしてみて思ったこと、④地域住民の方と接してみてどうだったか、⑤既習学習で活かされたこと、⑥今後の学習の動機付けになったか、⑦今後どのようにしていきたいか（今後の課題）

4) 分析方法

作成した逐語録からそれぞれの質問に対する回答を類似した意味内容（コード）ごとにカテゴリー化し（サブカテゴリー）さらにその上位概念のカテゴリーを作成した。分析の信頼性を高めるために分析の過程でグループメンバーとディスカッションを行い、さらに質的研究を行っている看護教員のスーパーヴァイズを受け、真実性を確保した。

V. 倫理的配慮

研究対象者に文面と口頭で研究の目的、方法、面接内容また面接の際に録音すること、研究参加の自由意志、プライバシーの保護、研究参加に伴う身体的・精神的リスク、途中で辞退できること、研究に参加することで不利益を被らないことについて説明し、同意書にサインしてから研究を開始した。本研究は帝京科学大学人を対象とする研究に関する倫理委員会の承認を受けている。

VI. 結果

地域住民が参加した技術演習を実施した学生のデータは演習に参加したことで得た学びと今後の学習への動機付けになることに大きく二分された。本研究では今後の学習への動機付けについて報告する。（以下カテゴリーは【 】,サブカテゴリーは< >,コードは「 」で記載する。）分析した結果、10個のサブカテゴリー、3個のカテゴリーが生成された。以下にカテゴリーごとの結果を示す。

本研究のデータから地域住民が参加した技術演習に参加する前に練習を行ったことで、当日バイタルサイン測定ができたことなどから【練習の必要性】を感じている。実施した際に模擬患者から褒められ、励まされたことで【自己効力感】を感じている。更に練習を積み重ねてある技術が確実にできるようになるだけではなく、患者の全体像を捉え、対象が生活する社会と結びつけながら対象を理解し、臨床で出会った看護師を想起しながら【もっとできるようになりたい】と発展的な考えに至っている。

1) カテゴリー1【練習の必要性】（表1）

<練習を積み重ねる必要性>

学生は「今回、事後学習がすごい重要だと思って、一回だけじゃ覚えなかったり、絶対血圧も測れなかった（中略）一回じゃなくて、自分で時間を見つけて少しずつ練習を積みかさねていかないと自分の力になっていかない」学生は授業では患者役は一回だけしかできないことや一回だけでは手順や方法を覚えられないことを実感している。一方では「今回はこういう機会があったので、バイタルサインの練習を二回ぐらいしたけど、こういう機会がなくても普段からやればできるようになるんだなってことが分かったので、常に練習する気持ちをもち続けたいと思います」と語り、事前に練習して臨み、バイタルサイン測定ができたことで改めて練習の必要性を感じている。

<素早く・時間をかけないようにする>

模擬患者に血圧測定した場面で「圧迫させて赤くなったので、最高血圧を測るまでに時間をもっと短くできたらと思った」と語り、また「血圧をはかる動作をして患者に負担をかけないようにしたい。これからは練習する予定です」と語られている。このサブカテゴリーの語りでは、血圧測定が上手くできなかったことで患者に負担を与えてしまうことが患者の身体反応から理解し、練習を行うことで負担をかけずに実施できると考えている。

表1 カテゴリー1：練習の必要性

コード	サブ カテゴリー	カテ ゴリ
<p>もっとできるかなと思ったけど、初めて流れを全部一人でやって、これから練習しなきゃ 経験が一番自分の力になるかと思うから、いっぱい経験をしないと。だから、もっとやっていきたい (教科書の内容)すべてが飛んじゃって、分かんなくなった (準備してきたことがとんでしまうへの対策)慣れ? あともう確実に頭の中に詰め込む (準備してきたことがとんでしまうへの対策)経験 (測定値への不安に対して必要な事)練習ですね 袖をまくるところからあんまり普段やらなかった、授業で一回ぐらいしかやってなかったの、患者さんとの距離もベッドといすの距離も久しぶりだったので、戸惑ってしまったので、普段から練習をする必要がある 学生同士でも脈見つからない時ちゃんと聞こえるか不安だったけど、何回か練習してだんだん分かるようになってきて、実際患者さんにもやったら分かるようになったので、回数を重ねれば慣れてくるのかなと思う 今まで自分は半年しかやってないけど、その中でも全然看護師さんに達してないなっていうのがあったので、今まで以上にもっと技術もコミュニケーションもやってかなきゃなって思う 今回事後学習がすごい重要だなって思って、一回だけじゃ覚えなかったり、絶対血圧も測れなかったの、これからどんな課題、実習の演習もなんですけど、それ一回じゃなくて、自分で時間を見つけて少しずつ練習を積み重ねていかないと自分の力にはなっていないなと思った 今回はこういう機会があったので、バイタルサインの練習を2回ぐらいしたけど、こういう機会がなくても普段からやればできるようになるんだなってことが分かったの、常に練習する気持ちは持ち続けたいと思う 血圧とかベッドメイキングもそうなんですけど、一回で成功させたり、確実な技術を身につけるところから、まだ基礎ができてないところがありとかするのでミスしてしまうので、もう一回ちゃんとやってしっかり完璧にできるようにする 技術的なことも今回はたまたまうまくいったかもしれないし、そんなに自信があつてやれたわけではないので、しっかり練習を重ねてうまくなっていけるようにする (普段からやればできるようになることが分かったの) ベッドメイキングもみんなのできる時はやったり、できない時は自分でできる範囲でやってみる工夫をしながらやりたい 話を引き出せたと思って、自分は無理なく話せ模擬患者さんが話題提供をしてくれることがあったので、普通に楽しく話しながら正確な値が測れるように、練習しなければと・</p>	<p>練習を積み重ねる必要がある</p>	<p>練習の必要性</p>
<p>うまくできない場面があつて、練習してもっとすばやくしていきたい 最高血圧を測るまでに時間をもっと短くできたら。压迫させ赤くなったので、もっと短くできたらと思う 時間かかったの、練習しておけばよかった。これからは練習する予定 血圧を測る動作を早くして患者に負担をかけないようにしたい。練習をもっとしようと思った</p>	<p>素早く・時間をかけない ようにする</p>	
<p>地域とのコミュニケーションができたこと。いろいろな人と話したい、体験したい 脈拍とか、高齢者と聞いていたのでとれなかったらどうしよう不安だったけど、はっきり聞こえて安心した。とれて安心したけど、実際は病院でやるとしたら、いろんな人がいるので、もっといろんな方の手を借りたい。学生でもいろんな人がいるので、いろんな人で試したいなと思った 高齢者だけでなく、いろんな人を対象にしたいから、そういうことも考えていきたい</p>	<p>対象に練習したい いろいろな人</p>	
<p>バイタルサインはやはり数をこなすのが重要だと思ったので、いろんな人を体験してみて、もっと自分の中で気づくことを増やしたい。 友達同士だと確認し合っていたから、もっと責任もってやる 集中して覚えたことをやるので必死で、あまりコミュニケーションがうまくとれなかった 学生同士だと気づけないことも発見できるので、大事だと思う 患者さんが学生ではない、ということでもいつも違う緊張感がある 学生同士では何々さんと呼ぼうと話していても、ゆるんでいたりするの、そういう人だとねじを閉めないといけない 普段は机といす出して、お互いやってるだけだったので、寝てる時と起きてる時って結構違うなと思ったり 今度練習する時は時間かかってちゃんと患者役はパジャマを着てとか練習しないと抜けてってしまうのかなと思った マンシュート巻くところから測り終わるところまで友達同士でもこれで一回で終わらせなきゃって思いながら、また患者と触れられるときにもっと自分が成長できるようになっていけばいいなと思う 学生同士だと気にせずやってしまう部分があったので、お年寄りだとここに気を付けたらいいとかいうことも勉強しなきゃいけないなと思いました。こんなにも難しいことが分かったの、もっと友達同士でも緊張感を持ってやれるかなと思って</p>	<p>学生同士でも緊張感をもつ 取り組む姿勢をもつ</p>	

<いろいろな対象と練習をしたい>

学内では学生同士での演習や練習であり年代も同じである。しかし病院に入院している患者はさまざまな年齢や疾患も異なり「実際は病院で(バイタルサイン測定を)やるとしたらいろんな人がいるので、もっといろんな人の手をかりたい。学生でもいろんな人がいるので、いろんな人で試したいなと思いました」と語られている。

<学生間同士でも緊張感を持って取り組む>

普段、学内で演習や練習を行うときは学生同士で実施するので「学生同士だと気にせずやってしまう部分があったので、お年寄りだとここに気を付けたらいいとかいうことも勉強しなきゃいけないと思いました」と語り対象に合わせて実施していないことに気づき、高齢者だとどのような点に配慮する必要があるのか、発達段階に応じたバイタルサイン測定時の留意点についても考えるきっかけになっている。また

「こんなにも難しいことが分かったので、もっと友達同士でも緊張感を持ってやれるかなと思って」と語り友達同士ではない初対面の模擬患者に実施したことで緊張はした部分はあるが、学生同士でも患者だと想像して実施するような取り組み姿勢について考えられている。

2) カテゴリー 2【自己効力感】(表 2)

<自信へのつながり>

学生は学生ではない模擬患者にバイタルサイン測定を実施することに不安があったが「血压がちょっと測れるようになったので、自信にはなったかな」と語り血压測定ができたことで自信につながっていく。また一連のかかわりの中から「患者さんも、すごい話してくれて、笑ってくれたり、なんか、自分が話すことで、患者さん、少しは元気になったかな」と患者役の変化に気づくことができている。

表 2 カテゴリー 2：自己効力感

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
(模擬患者に実施してみて) 血压がちょっと測れるようになったので自分への自信にもなった	つながりの自信への	自己効力感
今まで血压が失敗して心配だったんですけど、患者さん役に言ってもらえたので自信にはなった		
患者さんも、すごい話してくれて、笑ってくれたり、なんか、自分が話すことで、患者さん、ちょっと元気になったかな		
血压とかはちゃんと計れたので、とりあえずよかったと思った	肯定的な感情	
笑顔が素敵だって言われてよかった		
(話してみても) 楽しかったです		
すごくほめて下さったのでうれしかった		
よかったと先生に褒められても、学生と先生の関係なのでうれしいけど、そんなに・・・外の人に褒められれば、何倍もうれしくて		
最終的に楽しかったという印象		
患者さんから優しく接してくれたといわれたので、そこが、自分の良いところかと思えたので、そういった接し方はこれからも続けていきたい		
地域住民の方と接して楽しかった	肯定的に受け止める姿勢	
看護師には本当に感謝していると何度も言って「そういう看護師になってね」と言ってくれた。看護師に感謝しているのがわかったので「頑張ります」と素直に言った		
学生同士だとやっぱ気軽に聞けちゃう、自分の中で甘えができちゃうので、こういう授業があったら見直しも、自分の中でも準備しなきゃとか、責任感も出てくるので、こういう授業があればありがたい		
本当の患者さんだったら「どこがだめでしたか」なんて聞けなかつたりするけど、こういう場だからこそだめなところを言ってもらっていただくことで、自分では気づかない点ややっぱりすごいあると思う		
声掛けのやり方やバイタルサインのやり方とか、ほかの人からだめっていう意見を聞くことで、新たな学びになって改善していけるように練習したい		
褒められるっていうのは結構予想外だったので、「これから大変だと思うけど頑張ってるね」みたいな感じでも声かけてくれたので、知らない方でも一度接しただけで言ってくださるのは、「ああ、がんばんなきゃな」って思った		
学生同士でも感想聞いて、「これでよかったんじゃない」という意見しかないと思うけど、本当の意見を聞くことで、傷つくというよりは言ってもらっていただく機会がないからこそ、すごいありがたい		

< 肯定的な感情 >

学生は「地域住民の方と接して楽しかった」という感情が起こり、「良かったと先生に褒められても、学生と先生の関係なのでうれしいけど。そんなに・・・他の人に褒められれば、何倍もうれしくて」と語り、「患者さんから優しくしてくれたといわれたので、そこが、自分の良いところかと思えたので、そういった接し方はこれからも続けていきたい」とこれまで知ることのできなかった自分の良いところを知ることができている。

< ありがたい言葉をもらえる >

学生は患者役からの指摘を求めても「学生同士で感想をきいても、『これで良かったんじゃない』という意見しかないと思うけど、本当の意見を聞くことで傷つくというよりは言っていたく機会がないからこそ、すごいありがたい」と感じている。

< 理想の看護師像 >

学生は「話の引き出し方で事務的に血圧が終わった、脈拍が終わった、体温が終わったと進んでいくもののかなと思って・・・、もうちょっと温かみのある看護師になりたい」と語り、さらには基礎看護学実習Ⅰで出会った看護師を想起しながら理想の看護師像を描いている。

3) カテゴリー 3【もっとできるようになりたい】(表 3)

< 観察できるようになりたい >

学生が実施した場面を振り返って「測定しているとき、よく患者さんの顔が見れていなかったと思いました。自分の手元に必死で見れてなかった」と語り、実施している技術が確実に実施できているかばかりが気になってしまった。このような結果を受けて「看護の技術はどんどん高めていかなければいけ

表 3 カテゴリー 3：もっとできるようになりたい

コード	サブ カテゴリー	カテゴリー
看護の技術はもちろんどんどん高めていかなければいけない、それよりも患者さんの状態とかを観察しないといけないとすごく思った	観察 できる ように なり たい	も っ と で き る よ う に な り た い
日ごろから少しずつ人の行動を見て、いろいろ理解をしていきたい		
すごく(拍車がかかって)もっと色々やっていたらいいなと思う		
相手をよく見ることでか。今、何考えてるんだろう考えながら話ができればいいなって思いました。表情を見てなんか発見できることもあるかもしれない、体調悪いとか		
測定してる時、よく患者さんの顔見れてなかったと思いました。自分の手元に必死で見れてなかった		
もっと幅広い視野ももつことができたらいいなと思った	幅 広 い 視 野 を 持 ち た い	
もっといろんな人と話してみたいと思ったし、最近のニュースも見るようにしているけど、もっと社会のことも勉強したい		
年配の方と話す機会はあることはあるが、血圧まで測らせてもらえることはめったにない		
今後に向けて、技術や常識そして社会性も興味をもってまわりをみていかなければならないと思った		
コミュニケーションは、話すスピードとかは気をつけることは継続し、対象にあった話題とかができたらいいな	う ま く コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン を と り た い	
(模擬患者さんに)もうちょっと自信をもってというか、声をもうちょっと出した方がいいと言われた		
どんな患者さんとか、どんな相手でも相手がリラックスできるように話せるコミュニケーション能力を身につけられたら、もっと患者さんと近くなれるのかなと思うので、患者さんに寄り添えるようなコミュニケーションが取れるようになればいいなと思う		
コミュニケーションを取るっていうのがすごい難しいなって感じたので、うまくとれるように自分なりに演習の中でも考えていきたい		
コミュニケーションはすごい課題、どうしたら患者さんが心を開いてくださるか、まだまだ答えは見つからないけど、次実習行くまでにはもっとコミュニケーション取れる方法とか、意見も聞きながら見つけていきたい		
(相手に気持ちが伝わるコミュニケーション) 演習の時とかも、本当の患者さんだと思って、自分で考えながらやってくこと、また回数を重ねていくことで、実習行った時もまたこういう機会があった時にもさらにちょっと成長していけると思う		
私は、今回聞くことしかできなかったけど、どういう態度したら良いかわからなかったの、これからの課題で、勉強していけたら良いと思った		
話を引き出し方で事務的にポン、血圧が終わった、脈拍が終わった、体温が終わったと進んでいくものかなと思って・・・もうちょっとあたたかい看護師になりたいなと思って		
現場の看護師さんはすらすら年関係なく話してたので、あんなふうになればいいなって思う		

ない、それよりも患者さんの状態とかを観察しないといけないとすごく思った」と語り手技が確実にできることより患者を観察する方が重要であることに気づいている。

< 幅広い視野をもちたい >

学生は普段接することのほとんどない模擬患者と接し「もっといろんな人と話してみたいと思ったし、最近のニュースは見るようにしているけど、もっと社会のことを勉強しないとけない」と語り模擬患者が生活する地域や社会について知るだけでなく勉強する必要性を感じている。

< うまくコミュニケーションをとりたい >

学生にとっては基礎看護学実習Ⅰを修了しコミュニケーションは大きな課題の一つになっている。「コミュニケーションはすごい課題、どうしたら患者さんが心を開いてくださるか、まだまだ答えは見つからないけど、つぎ実習に行くまでにはもっとコミュニケーションが取れる方法とか、意見も聞きながら見つけていきたいなと思います」と語られ、今回の模擬患者が参加した技術演習でも同様にコミュニケーションは課題にあがっている。

Ⅶ. 考察

学生の動機づけは【練習の必要性】、【自己効力感】、【もっとできるようになりたい】の3個のカテゴリーで生成されている。

1) 【練習の必要性】

練習の必要性では提供する技術が確実にできること、対象に負担をかけないように素早く、時間をかけずに実施することを目指し、それをできるようになるためにはどのようにすればよいのかを考えている。

学生たちは初対面の模擬患者に向かうと緊張して「(教科書の)内容がすべて飛んじゃって、分かんなくなっちゃいました」と語られていること、事前に演習や練習をしても「一回だけでは覚えられない」と実感している。バイタルサインの測定値で知れる血圧、脈拍、体温、呼吸数などは患者の状態を知ることのできる情報であり、技術が未熟で正確な値を得ることができなければ、意味がないことをこれまでの学習や経験ですでに知っている。正確な値を得るためには「一回だけじゃなくて、自分で時間を見つけて少しずつ練習を積み重ねていかないと自分の力になっていかない」と語られているように練習を

積みかさねて確実に実施できるようにならなければならない。ここで表現されている「自分の力」という表現は確実に技術が提供できることを示しており、それは他者から強制された思いではなく、自分自身の中から湧きだした思いである。血圧測定を例にすると何回かはうまく血圧測定ができず正確な値がわからなかったが、練習を重ねることで、できるようになり、正確な値を得られることによって次に血圧測定を実施するときにも正確な値が得られ、またその次も正確な値が得られる。この繰り返しによって血圧測定という技術が獲得でき、さらには得られた情報から患者の状態を把握、分析、予測することができるようになる。すなわち自分自身が獲得した技術を提供することにより患者の情報を次に実施する技術やケアに生かせることになる。

患者に負担をかけずに安全・安楽に技術が提供できるようになるためにはいろいろな対象と練習したい>と考えている。学生同士で実施する場面では「学生同士だと気にせずやってしまう部分」、「気がゆるんでしまう」部分がある。今回の演習ではよりリアリティのある演習を展開したことで、これからの演習に対する取り組み方や練習のあり方について学生自身が考え展開していこうとする姿がみられた。

学生自ら演習や練習の方法について考え、今後の取り組み方について「今度練習するときは時間かかってちゃんと患者役はパジャマ着て練習しないと抜けていってしまう」、「学生でもいろんな人がいるので、いろんな人で試したい」と具体的な例を示している。学生同士での練習に対する具体例は先行研究にはみられていない。具体例を示せたのは一つには基礎看護学実習Ⅰが終了し臨床での現象を比較的早い段階で比較、想起しながら考えられていたことが一つの誘因になっていると考えられる。

2) 【自己効力感】

学生は血圧測定ができたことで「自信にもなった」とことや模擬患者が「自分が話すことで患者さんが、ちょっと元気になったかな」と感じている。さらに「楽しかった」、「他の人に褒められれば何倍も嬉しい」と肯定的な感情が生まれている。この楽しいという感情は加悦⁴⁾が看護学生と医学生に対して実施した模擬患者参加型課外学習活動の取り組みの質的研究報告で看護学生の感想としても「参加した喜び」というカテゴリーが生成されている。さらに江川²⁾も同様の報告をしている。しかしこれとは逆に「他の人たちからダメっていう意見を聞

くことで、新たな学びになって改善していけるように練習したい」、「本当の患者さんだったら『どこがダメでしたか』なんて聞けなかったりするけど、こういう場だからこそダメなところを言っていたくことで、自分には気づかない点がやっぱりすごいあると思う」という語りは模擬患者に言われたことを受け止め自分自身のなかで一旦咀嚼することで、課題を見つけ、もう一段先に進む原動力となっている。岡田ら⁵⁾の基礎看護学実習Ⅱにおいて達成動機が高まった看護学生の実習課程とそれに伴う思いを明らかにした研究の報告によると「実習中には解決や改善が図れず、課題が残っていてもそれが今後の課題と捉えていたことは、学生が学習者としての現在地を客観的に評価し、今後につなげようと前向きに捉えている現れである」と述べられている。今回試行した演習は実習ではないが、地域住民が患者役となって参加したことにより、リアリティがあり、より臨床に近い環境で演習ができたことから、学生の気付けない課題を明らかにしてもらい、自身の課題と受け止めることができていた。その課題を解決するために「新たな学びになって改善していけるように練習したい」と前向きな発言が聞かれている。さらに基礎看護学実習Ⅰで出会った看護師を想起し「あんなふうになれたらいいな」と思っている。基礎看護学実習Ⅰで出会ったときにも同様のことを感じていたのかも知れないが、初対面の模擬患者と接し、看護師役として関わったことでより身近に感じていると思われる。学生個々に理想の看護師像があり、同じようなことを想像する場合もあればそうでない場合もある。個々に想像する看護師像は違って当然であると思うが、「あたたかい看護師になりたい」という思いは共通していると考えられる。鷺田は「〈共同の現在〉という時間性格をもった関係の場こそ、哲学にとっての「臨床」の場である」⁶⁾と述べている。患者とは限らない他者との関わりの場こそが臨床である。看護師が患者と関わる臨床では他者を受け入れることが必要になる。その場に巻き込まれながら時間を共有し未来を創造していくには「血圧が終わった、脈拍が終わった、体温が終わった」と事務的に時間が過ぎていく関わりに疑問を持ち、そうではないと確信している。

3) 【もっとできるようになりたい】

実施したことや模擬患者からのフィードバックを受けたことで学生たちは自分自身の技術不足だけでなく、患者の全体像を把握できるように観察で

きるようになりたい」と感じている。また模擬患者とコミュニケーションをとる中で社会に関心を持つこと、コミュニケーションをもっと上手にとりたいと願っている思いは江川らの「視野の狭さにきびいた、コミュニケーション力の不足を感じた」²⁾という記述と同様である。これらのことから、学生は学生ではない模擬患者と接することで自分達の知らない世界を知り、社会性を身につけていかなければ、さまざまな対象に対応することができないことを痛感している。

Ⅷ. 結論

学生は地域住民が模擬患者として参加した技術演習に参加して模擬患者からフィードバックをもらったことで模擬患者に興味を持ち、自分自身の技術や思いにも関心を持つようになった。これらの興味や関心から発した今後の学習への動機付けは【練習の必要性】【自己効力感】【もっとできるようになりたい】である。

Ⅸ. 今後の展望

本研究は地域住民が模擬患者として演習に参加することでどのような学習効果があるのかを知る一つの資料であり、今後、本格的に導入するには更なる地域との連携、協働、地域への還元ができるシステムを構築していく必要があると考える。

引用参考文献

- 1) 阿部恵子：医療者教育における模擬患者（SP）の歴史と現在の活動．看護教育 62（7）：502-509. 2011.
- 2) 江川幸二，グレッグ美鈴，沼本教子他：看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価－学生の感想・意見から－．神戸市看護大学紀要 15：7-15, 2011.
- 3) 堀洋道：心理測定尺度集Ⅳ，サイエンス社，東京都，2012. pp124.
- 4) 加悦美恵，森本紀己子：医・看護学生のための模擬患者参加型課外学習活動の試み．日本看護学教育学会誌．19（3）：47-56, 2010.
- 5) 岡田初恵，榎本朋子：基礎看護学実習Ⅱにおける実習過程に伴う看護学生の思い－達成動機が高まった学生を対象とした調査から－．川崎医療短期大学紀要．31：7-13, 2011
- 6) 鷺田清一：聞くことの方．阪急コミュニケーションズ，東京，2008. pp63

- 7) 阿部オリエ, 小手川良江, 本田多美枝他: 看護学実習前演習に地域住民が模擬患者 (simulated patient: SP) として参加することの意義に関する研究. *日本赤十字九州国際看護大学紀要* 11: 49-56, 2012.
- 8) 井上京子, 山田香, 南雲美代子他: 当大学看護学科における模擬患者参加型授業の実際. *山形保健医療研究* 15: 33-43, 2012.
- 9) 堀美紀子, 村松千鶴, 淘江七海子: 模擬患者を活用した教育方法の検討. *香川県立保健医療大学紀要* 1: 89-96, 2004.
- 10) 篠崎恵美子, 渡邊順子, 坂田五月他: 模擬患者による解釈モデルの説明が学生の看護アセスメントの認識に及ぼす影響, *日本看護学教育学会誌*. 20 (1): 49-61, 2010.
- 11) 上淵寿: *動機づけ研究の最前線*, 北大路書房, 京都府, 2012.